

福澤諭吉展

+ 新春の風景

展示にあたって

福澤諭吉（1835-1901）は、幕末から明治の激動の時代に革新的な活動を展開し、日本の近代化に大きな足跡をのこしました。今回の展示では、福澤が日本に定着させようと尽力した「演説」の草創を伝える資料、学校教育における「体育」の重要性に一早く着目した福澤の「健康」に関連する資料、そのほか自筆の書入れ本などを展示します。常に時代の先を読んでいた福澤諭吉の精神を感じ取っていただければ幸いです。また正月にちなんだ資料も展示しますのでお楽しみください。

< 展示ケース 1 - > 福澤と慶應義塾

「慶應義塾之目的」 書幅 明治 29(1896) 1 幅

[福澤関係文書]



明治 29 年（1896）11 月 1 日、芝紅葉館で行われた慶應義塾旧友会（三田に移転する前に義塾に学んだ者の同窓会）席上で、福澤が行った演説の一節。この演説で福澤は、義塾が培ってきた一種特別な気風・気品を維持継承して世の先導者となっていくべきことを訴えた。そして、末尾において「慶應義塾は単に一所の学塾として自から甘んずるを得ず。其の目的は我日本国中に於ける気品の泉源智徳の模範たらんことを期し、之を實際にしては居家处世立国の本旨を明にして之を口に言ふのみにあらず、躬行実践以て全社会の先導者たらんことを欲するものなり」と述べ、その部分を改めて書き残したのがこの書である。

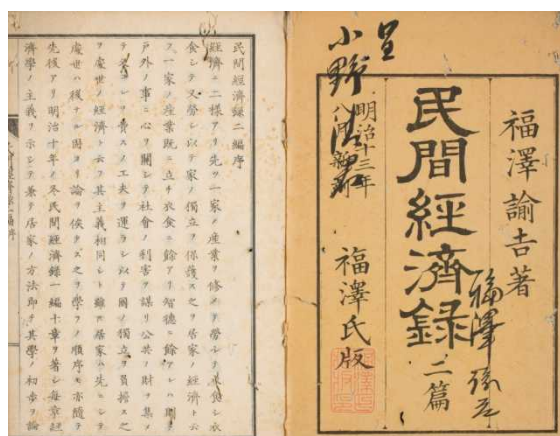
福澤はこの演説を「恰も遺言の如くにして之を諸君に囑託するものなり」と結んでおり、義塾出身者のあるべき姿を示した「気品の泉源、智徳の模範」の語は、今なお慶應義塾のモットーのひとつとして尊重されている。（『未来をひらく福澤諭吉展』より）

< 展示ケース 1 - > 福澤の書入れ・署名本

Utilitarianism / by John Stuart Mill. Fifth edition. London : Longmans, Green, Reader, and Dyer, 1874. (『功利主義』 ジョン・スチュアート・ミル著 明治7年(1874)刊 第5版 1冊、明治9年福澤諭吉書入本) [福澤関係文書]

福澤が最も影響を受けたとされる洋書のひとつ。本資料は福澤旧蔵本で、書中至るところに鉛筆や毛筆による書き込みが見られ、その量は旧蔵書中で群を抜いている。書入れによると、ミルの主張する正・不正の時勢に伴う変遷や、理に貪欲であり能動的で活発な精神の養成の重要性などに深い共感を持っていたことが伺える。展示ページには「ノーブルフヒーリング」(noble feeling)の重要性に関する書き込みがあり、「満足する豕ニ為ルハ不満足ナル人ト為ルニ若カズ」、あるいは「高尚ノ気風」の養成に「人ニ交ルノ要」があるといった感想が記されている。

『民間経済録二編』 福澤諭吉著 東京：福澤諭吉，明治13(1880)刊 1冊(福澤諭吉署名本) [福澤関係文書]



『民間経済録』には初編と二編とがある。初編は明治10年(1877)、福澤44歳の年に初版が発行された。福澤は最初この一編だけで終わらせる予定であったらしく『民間経済録全』として、第二編を予告するような文言はみあたらない。しかし初学者のための世情に照らした経済学の書物がほとんどなかったことから、この一書は非常に歓迎され、続編を求める声が高く、明治13年(1880)8月に二編が出版された。初編は「物の価の事」「賃銭の事」「倅約の事」「正直の事」「勉強の事」「通用貨幣の事」「物価高下の事」「金の利の事」「政府の事」「租税の事」の10章構成。二編は「財物集散の事」「保険の事」「銀行の事」「運輸交通の事」「公共の事業の事」「国財の事」の6章から成る。本資料には見返しに「呈 小野清君 福澤諭吉」と署名がある。(『世紀をつらぬく福澤諭吉』より)

『西洋事情』 福澤諭吉著 初版 慶應2(1866)刊 10冊 (福澤諭吉書入本) [福澤関係文書]

本書は初編、二編、外編から成る福澤の代表的な著作。福澤が3回渡航して得た外国での見聞が記されているほか、アメリカ、イギリス、ロシア、フランス、オランダなど西洋文明国の歴史や経済社会、政治制度についても紹介されている。当時、日本人は西洋について断片的な情報しか得ることができず、また得る手段も持っていなかった。福澤は洋書から得た知識をわかりやすい言葉で訳し、本書で体系的に紹介している。展示資料には福澤による朱筆の書き込みがある。

『西洋事情』 写本 [福澤関係文書]

版本の『西洋事情』より先に作成されたもの。同書の原型を示すものであろう。

「福澤先生ノ使用セラレシ名刺」

[福澤関係文書]

福澤諭吉が使用した名刺。ガラス製の額縁に入れて保管されてきたが、その裏書により石河幹明(1859-1943)の寄贈であることがわかる。石河は水戸藩士の子として生まれ、明治14年(1881)慶應義塾入塾。卒業後は時事新報社に入社し、明治24、25年頃から社説の重要なもの以外の起稿を任せられるようになり、福澤の没後も大正11年(1922)まで20年以上にわたって時事新報社の主筆を務めた。

< 展示ケース1 - > 福澤諭吉と健康

『福澤諭吉居合数抜記録』 東京：明治26-28年(1893-1895)

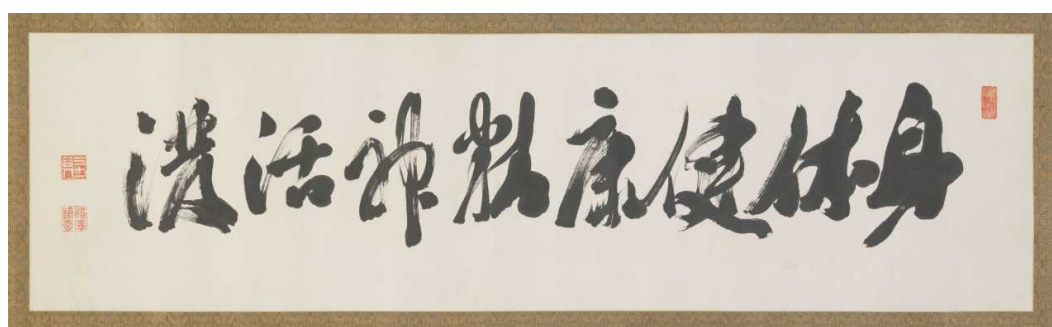
[福澤関係文書]

『福翁自伝』において「先ず獸心をなしてのちに人心を養う」と説いているように、福澤は身体の健康を非常に重視していた。みずからも健康の維持のために、毎日の散歩、米つき、居合という3つの日課を貸していた。『福澤諭吉居合数抜記録』は明治26(1893)年から28(1895)年にかけての居合の「数抜」の回数を福澤がみずから記録したもの。福澤は少年時代に中津で「立身新流」の居合を習い、鍛錬を続け、達人の域に達していたといわれている。この記録によれば、毎日1000本以上抜いており、福澤が還暦を超えてもなお、厳しい鍛錬を続けていたことが分かる。この日課は明治31(1898)年に脳溢血で倒れるまで欠かさず続けられた。

「身体健康精神活発」 墨書 1枚

[福澤関係文書]

福澤諭吉は「先成獸身而後養人心」(まずじゅうしんをなしてのちじんしんをやしなう)、『福翁百話』)との考えから、体育の重要性をいち早く認め、三田山上にブランコやシーソー、鉄棒などの遊具を設置して「ジムナスチック」の時間を設けていた。今日でも「身体健康精神活発」の言葉は、幼稚舎の重要な教育方針のひとつとなっている。また、本年開校予定の横浜初等部の『学校案内』でもこの墨書が紹介されている。



「幼稚生柔軟体操図」 山本松谷画 (『風俗画報』第74号) 明治27年(1894)

『風俗画報』第74号に掲載された、明治27年(1894)5月26日の慶應義塾運動会の図の一部。右側は400ヤード競走の図、左上は幅飛の図である。幼稚舎が早くより体育を積極的に取り入れていたことがわかる。義塾では明治19年6月6日に最初の運動会を三田山上で行っており、それ以後東京の名物のひとつとなっていた。

「散歩中の福澤諭吉」 写真パネル 1枚

福澤諭吉が健康維持のために行っていた3つの日課は、居合い、米つき、散歩である。特に散歩は、脳溢血という大病を患った後も継続していた。「散歩党」と称する塾生や塾員が随行し、晩年の先生からさまざまな教えを受けていたという。この写真は、福澤家の護衛(右)と塾生(左)とともに散歩する福澤諭吉。尻端折に股引き、綿入れのようなものを来た防寒姿で、烏打帽を被り、杖をついている。同行者2名と比べて大きな体格の福澤は、身長が170センチ以上あった。



<展示ケース2> 福澤諭吉と演説



『三田演説日記』 明治7-33年(1874-1900)4冊

[福澤関係文書]

日本における演説の草創を伝える慶應義塾関係者による演説会の日誌。福澤が「speech」の訳語に「演説」の語を当てたことは有名である。公衆の前で自らの考えを述べる行為を一日も早く日本に定着させる必要があると自ら率先して、明治6年(1874)夏頃から練習を開始し、明治7年(1874)6月27日開始されたのが三田演説会である。演説会はたちまち評判になり、一種の娯楽として、また新知識を得るメディアとして、自由民権運動などにも普及していった。福澤の参加した時期の日誌は、明治33年(1900)1月の第402回までを記録する4冊で、そのうち236回福澤が演壇に立っている。三田演説会は今日まで継続し、現在695回(平成24年(2012)末現在)を数える。

『福澤諭吉演説像(額装)』複製 松村菊麿模写(原画:和田英作) 昭和12(1937)

本作品は、昭和12年(1937)2月から5月にかけて三田大講堂内にて、明治期を代表する洋画家和田英作の描いた福澤諭吉肖像画全身像を門下の松村菊麿が模写したもの。高橋誠一郎によれば、本作品の福澤のポーズは和田英作がその父から聞いた福澤の演説中の姿らしい。しかし、高橋誠一郎は、演説する福澤がこのような威厳を感じさせるポーズをとることはなく、気さくな感じで演壇に手をおいて話されたと述べている。昭和35年(1960)に義塾に寄贈されて以来、現在まで三田演説館の演舞台上に掲げられ、広く福澤のイメージとして親しまれている。和田英作によるオリジナルは、三田の大講堂の舞台中央壁面に掲げられていたが、戦災により焼失した。

「三田演説館 - 旧位置時代隣接スル八旧塾監局 - 」(写真)

「三田演説館内部 - 旧位置時代 - 」(写真) [慶應義塾写真データベース 10100193, 10100195]

明治8年(1875)5月、三田の慶應義塾構内(現在塾監局と呼ばれる建物の北側付近)に建設された日本最初の演説会堂。床面積192.16㎡、木造2階建て。外交官・富田鉄之助が福澤に送っ

た数種の会堂の図を参考に設計された洋館であるが、瓦葺き、板瓦貼りなまこ壁の外壁を有する和洋折衷の建築史的にも珍しい建物。関東大震災後の大正13年(1924)、建物の保存を目的に義塾構内の稲荷山に移築され、昭和20年(1945)の空襲も辛うじて免れた。福澤は、この建物は演説館として「日本開闢以来最第一着の建築」であり、「後五百年、一種の古跡として見学する人もあるべし」(『福澤全集緒言』)と記したが、大正4年(1915)東京府の史蹟、昭和42年(1967)には国の重要文化財に指定された。戦後2度大規模な修復が行われ、今なお続く「三田演説会」や名誉学位授与式、その他の式典等に使用されている。これらの写真は、移築前の様子を伝える写真である。

< 展示ケース3 > 正月の伝統遊戯

『五十三驛東海道富士見雙六』 一立斎広重画 和泉屋市兵衛板 [110X@583@1]

「東海道五十三次」で知られる浮世絵師の歌川広重が、東海道の名所を描いた双六。江戸の日本橋を振り出しとし、各宿場を経て京の三條大橋で上がりとなる。富士山は、箱根・原・吉原・由井・舞坂の5つの宿場のコマで描かれている。広重は他にも様々な道中双六をつくっており、それらは旅の疑似体験ができるものとして人々に親しまれた。

『古かるた貼込帖』 [江戸後期]写 旋風葉 1帖

[1002@62@1]

色刷りの古かるたを貼りつけて1帖としたもの。慶應義塾図書館所蔵の中国関係資料の一郭を成す田中文庫のなかの1点である。田中文庫は東洋学者として著名であり、史学専攻創設の基を築いた田中萃一郎(1873-1923)の旧蔵書。旋風葉は折本の表紙の上下を1枚の紙でつなげた装訂で、風に当たると各葉が翻るために「旋風葉」の名がついた。



『小倉山庄色紙和歌』 [宗祇][著] [近世初]刊 古活字 1冊 [110X@166@1]

かるたで知られる「百人一首」は、鎌倉時代初期に藤原定家によって編まれたとされる秀歌撰で、成立当初は「小倉山庄色紙和歌」などと呼ばれていた。室町末期の連歌師・宗祇による注釈書『百人一首抄』(宗祇抄)が出されると、一般にも知られるようになった。この注釈書は、細川幽斎による注釈書『百人一首抄』(幽斎抄)の基となり、数ある注釈書の中で、どちらも代表的なものとして知られる。本書は文明10年(1478)の奥書がある「宗祇抄」の増補本として著された明応2年(1493)奥書本の古活字版である。

『小倉山百人一首(外)』 [藤原定家][編] [江戸前期]写 奈良絵本 1冊 [132X@172@1]

百人一首絵は室町時代までのものは残っておらず、江戸時代以降、画帖・絵巻・版本・かるた・扁額など様々な形式で制作されるようになった。本書は、繊細な筆致と鮮やかな彩色で描かれた

歌人の肖像（歌仙絵）が挿絵となっている百人一首の写本である。書体は流麗な仮名が特徴の松花堂流。桐箱入り、金糸で文様を織り出した金襴表紙、金色の見返しなど、装丁も美しい。百人一首かるたで皇族などの札によく見られる上畳（台座）は、持統天皇、祐子内親王家紀伊、式子内親王の3名にしか描かれていない。



持統天皇は百人一首で2番目（1番目は天智天皇）、女性歌人の1番目であるため、かるたの歌仙絵でもひととき華やかに描かれていることが多い。

なお、持統天皇（645～702）が、850年以降に成立したとされる十二単を着用しているのは時代錯誤であるという指摘もあり、当時の時代に相応しい唐様の衣装を着ているかるたもある。

< 展示ケース4 > 正月の縁起物

『江戸府内繪本風俗往來』3編 菊池貴一郎著・画 東京: 東陽堂, 明治38(1905)年刊 1冊

[215@1422@1~2]

江戸の町における風俗を絵入りで解説したもので、江戸における人々の生活や文化を全般的に知ることができる貴重な資料。正月の風物についても「初日の出」「御吉例門松」「魚かしの初売」などの項目をたてながら話を進め、元旦に初浴を楽しむ風呂屋の様子なども紹介している。幸田成友旧蔵書。

『江戸名所圖會』7巻 齋藤長秋編輯；藤原縣麻呂[齋藤幸孝]、月岑幸成[齋藤月岑]校正；長谷川雪旦畫圖 江戸：須原屋茂兵衛；江戸：須原屋伊八、天保5-7年 1冊 [227@41@1~20]

鳥瞰図を用いた江戸の地誌紀行。日本橋から始まり、江戸の各町についての由来や名所案内を記し、江戸の町に関する一級資料となっている。武蔵野、川崎、大宮、船橋といった江戸近郊まで記述が見られる。「勝安芳」の朱印があり、勝海舟の旧蔵書であることがわかる。展示は正月三日の谷中七福神のひとつ護国院の大黒詣を描いた挿絵。

「羽子」 武内桂舟画 「文芸倶楽部」 東京: 博文館 明治35年第8巻1号

明治35年の新春号に「羽子（はね）」という題で、正月の晴れ着を着た女性が松の内注連縄の張られた門口で羽子つきを楽しんでいる様子がある。描いたのは明治・大正期の浮世絵師、挿絵画家である武内桂舟（1861-1942）。文芸雑誌である「文芸倶楽部」は、巻頭の小説とは関係ない美人画口絵を季節に合わせて挿入し、好評を博した。



< 展示ケース 5 > 巳年 - へびが登場する資料

Georges-Louis Leclerc, Comte de Buffon. *Histoire naturelle, generale et particuliere, avec la description du Cabinet du roi*, [par M. de Buffon] A Paris: De l'Imprimerie royale, 1749-1804
44 v. vol.31 Histoire naturelle des serpens (ビュフォン『一般と個別の博物誌』)

[120Y@544@36@31]



博物学者・ビュフォン(1707-1788)の代表作『一般と個別の博物誌』は、1749年に最初の3冊が刊行された。この3冊は総論にあたるもので、評判を呼び、印刷されたすべての部数が6週間で売り切れた。

その後1753年から1804年にかけて、「四足獣の自然誌」「鳥類の自然誌」「自然の諸時期」「鉱物の自然史」が加わっていった。88年にビュフォンが没したのちも弟子たちの手によって刊行は続き、1798年から1808年にかけて「両性・爬虫類誌」が加えられた。版型は4つ折りで、挿絵本といえば大型2つ折りが普通だった当時としては小型である。当時のインテリ家庭の書棚には必ずこの本が収められていたといわれており、フランスが生んだ自然科学関係書の最初のベストセラーであった。

The baby's own Æsop / being the fables condensed in rhyme with portable morals pictorially pointed by Walter Crane ; engraved & printed in colours by Edmund Evans

(『幼な子のイソップ』 ウォルター・クレイン画) [Tokyo]: ほるぷ出版, 1979.

1887年刊の復刻版 (複製 世界の絵本館オズボーン・コレクション)

[1BB@244@33]

「農夫と蛇」

ある冬の寒い日、農夫が雪の上に死にかけている蛇を見て、かわいそうだと思い懐に入れて暖めながら家に帰り、蛇を暖炉の前に置いたのが間違い。息をふき返した恩知らずな蛇は農夫の妻と子供に噛み付き、死に至らしめた。

教訓:「邪悪なものから恩返しは期待できません」

『鳥歌合画卷(雀の発心)』 [室町末江戸初写 伝土佐広周筆 絵巻 1軸 [132X@35@1]

箱書に『鳥歌合画卷』とあるが、一般には『雀の発心』の名で知られる物語である。室町末期の絵巻が数点現存するが、慶應本の特徴は和歌が非常に多く、そのそれぞれに絵が描かれている点にある。箱書に土佐派の絵師「土佐広周筆」とあるが真偽のほどは不明。文学部出身の国文学者・横山重(1896-1980)の旧蔵書である。物語の内容は、雀の夫婦がえさを求めていなくなったすきに、蛇が小雀を食べてしまうという



もの。雀夫婦が説教をした蛇が歌を詠み、鶯、隼、鶯、雁といった鳥が慰めの和歌を詠んでいる。

< 展示ケース 6 > 福澤諭吉・慶應義塾と正月

『改暦辨』福澤諭吉著 [東京]：慶應義塾，明治 6 年(1873)刊 1 冊 [120@37@1]



明治 5 年 11 月 9 日、明治政府から改暦の布告・詔書が下された。これは従来の太陰暦をやめ、太陽暦の採用することを知らせるものだったが、その実施は 23 日後の明治 5 年 12 月 2 日。これを明治 6 年 1 月 1 日に設定するという、唐突なものだった。告知のみで新暦の説明もない政府の対応に不満を抱いた福澤は、新暦を説明するためにこの本を書いた。このとき福澤は風邪をひいて床に就いていたが、そのまま執筆。たった 6 時間で書きあげたという。この中で福澤は旧暦と太陽暦の違いや時計の読み方などをわかりやすく説明している。この「改暦辨」は折しも新暦の始まる明治 6 年 1 月 1 日に刊行。そのタイミングのよさと内容のわかりやすさで飛ぶように売れ、10 万部を超えるベストセラーとなった。

『福澤文集』2 編 福澤諭吉著 東京：松口榮造、明治 11 年 (1878) 刊 2 冊 [112@23@2]

巻二に「明治十二年一月廿五日 慶應義塾新年発会之記」を収録。同会で福澤先生が行った演説が記されている。「本日新年ノ發会ニ付聊カ當塾ノ履歴ヲ述ヘテ以テ諸君ノ聽聞ニ供セントス盖」とあり、福澤先生が慶應義塾設立から今に至るまでの流れを説き、今後も兄弟のように協力して慶應義塾を維持していくようにと述べている。

『慶應義塾大学學報』85 号 東京：慶應義塾 明治 37 年 (1904)

『慶應義塾大学學報』86 号 東京：慶應義塾 明治 38 年 (1905)

明治 37 年 (1904) 12 月に発行された『慶應義塾學報』85 号に、慶應義塾新年祝賀名刺交換会の告知と案内が掲載された。86 号では、この会の模様が紹介されている。当日の会場には福澤先生の肖像が掲げられ、遺墨や書簡の他、先生が愛用した居合刀や米つきのための臼と杵が展示された。集ったのは義塾出身者や維持会員などの人々。会は朝の 9 時から 16 時まで続き、人々は正月料理を楽しみながら親睦を深めた。会のさなかに日露戦役の旅順作戦における松樹山砲台占領の号外が入ったこともあり、戦勝ムードも手伝って、会は非常に盛況だったという。この新年祝賀名刺交換会は毎年の恒例となり、現在は 1 月 10 日の福澤誕生日に合わせて開催されている。

第 1 回 慶應義塾新年名刺交換會 (写真) 明治 38 年(1905) 1 月

『慶應義塾五十年史』[3K@6@1]にも同写真が掲載されている。

福澤先生記念會 (写真) 大正 5 年(1916) 1 月

第 176 回福澤先生誕生記念會 / 新年名刺交換會 (写真) 平成 24 年(2012) 1 月 10 日

記念講演、合唱、小泉信三賞全国高校生小論文コンテスト表彰状授与、懇親会などが行われている。